



Atushi Komizo



Hiroyuki Ishihara



Takeshi Kashiyama



Yukio Takabayashi



Masashi Ota



Kosuke Shimono



Masato Futagawa



Shigeo Furuno



Satoshi Nakakoga



Daisuke Shinomiya



Toru Kogure



Kazuo Hasegawa



Yosuke Kinoshita



Tomohiro Tabata



Wataru Minami



Keiichi Narita



Daisuke Sasaki



Kazuhiko Tsujino



Makoto Ohya



Toru Yoshida

技科大の顔

07

2025年 春号

同窓会と以下の在学生が協力し、制作・配信しています

機械工学系 代田 智教
電気・電子情報工学系 内藤 初月
情報・知能工学系 梶浦 真帆
建築・都市システム工学系 未廣 杏月



古溝 徳司

Atushi Komizo

2011年 機械システム工学専攻 修了
北村健三 研究室

1986年 愛知県生まれ
豊田高専 卒業

2011年 日本車輛製造株式会社 入社
現在 同社
鉄道車両本部 品質保証部
車両検査課 検査一係 席主任

高専卒であった父の影響を受けて機械が身近にある環境で育ったおかげか当人も自ずと機械に興味を持ち、父と同じ高専の門を叩き、就職と進学で迷った際も父の勧めで豊橋技術科学大学への編入を決めました。卒業後は鉄道車両の品証畑一筋14年、新設計特急車両の検査立ち上げからデビューまでの対応、老若男女に親しまれていたすでに引退してしまった車両のオーバーホール業務など様々な経験をさせてもらいました。中でも3年目に訪れた海外出張は大きな気付きの機会となりました。入社当時から海外需要が旺盛で入社早々海外案件に携わる同期も多く、私にも出番が回ってきました。高専時代の恩師のひとりとは常々「イチローは英語が喋れるからアメリカに行くのではない。野球が一流だからアメリカに行くのだ。」と話していました。学生時代はまずしっかりと勉学に励んで基礎を固めて、社会人となりさらに知識を付けて一人前の技術者になりなさいと受け止めていました。しかしながら実践となると違いました。日本は先人の上に立つ技術立国であり、社会人として世に出るとその会社を背景に即世界と戦う必要があることに気付かされました。幸いにも大学在学中のサークル活動を通して身に付けた「今できる最善策を探す」と「思いついたら即実行」の精神を会社の諸先輩方の経験・指導と掛け合わせることで大小ある難局を切り抜けることができました。社会に出てすぐ世界を舞台にするためには学業というペースと学生時代にいかにか他人とは違う自分にはかないパーソナリティに気付き、磨き、落とし込めるかが大きいと思います。これを読んでくれている現役学生の皆様も学業と並行して何か一つ取組み、充実した学生生活を送ってもらえと幸いです。



檜山 武士

Takeshi Kashiyama

1994年 エネルギー工学専攻 修了
竹園茂雄 研究室

1969年 三重県生まれ
鈴鹿高専 卒業

1994年 スズキ株式会社 入社
第二生産技術部 塗装課 配属
現在 同社 環境・材料・生産技術開発部 主幹

高専5年のころはちょうどバブル絶頂期で、就職先も複数選べる安心感から、自分の成績も顧みず大学編入にチャレンジし運よく合格、ということで、そもそも学業や研究はイマイチでしたが、かわりに部活動に力を入れた学生時代でした。といっても体育会系ではなく(剣道部でも細々と活動しておりましたが)ロボットコンテスト。高専ロボコンでの楽しかった経験が忘れられず、大学でも話の合う友人と一般向けのコンテストに参加していました。転機は1992年、機械学会を通じて募集のあった「NHKロボコン大学部門」へ学内の有志を募って出場したことです。結果は芳しくなかったものの、その後、仲間たちと「ロボコン同好会」を設立し活動を開始しました。今となっては国内屈指の強豪校であることは皆さんご存じのとおりですが、立ち上げ当初は予算も活動場所もなく、解体業者から500円でパーツを買ってきたり、体育館が使えないため製図室で製図版を横に寄せて試走場所にしていたこともありました。卒業後はスズキ株式会社に入社し、生産技術部で塗装設備の立ち上げを5年ほど担当した後、開発部門に異動して今に至ります。就職して30年、技術者としてそこそこやってこれたのも、大学で受けた、技術と理論のバランスの取れた教育と、それを実践できたロボコンの経験が仕事に生きているからだと思います。仕事の他、卒業後も個人参加でロボコンに出たり、昨年(2024年)放映された「魔改造の夜」へも関わったりしております。この「技科大の顔」を改めて見ると、様々な分野で多くの方が活躍されており心強い限りです。現在は仕事でいろいろな方との協業を模索しているところでして、OBの皆さんとも何かコラボできればと思っています。ご興味ありましたらぜひよろしくお願ひいたします。



石原 央之

Hiroyuki Ishihara

1995年 エネルギー工学専攻 修了
畔上秀幸 研究室

1970年 長野県生まれ
長野高専 卒業

1995年 (株)トヨタマックス 入社
2016年 トヨタ自動車(株) 承継
現在 トヨタ自動車(株)
パワートレーン計画部 主幹

修了から年月が流れ、30年の節目を迎えます。改めて技術の進歩を肌で感じております。当時、インターネットは黎明期で、携帯電話は学生には高嶺の花、製図も手書きの時代でした。そんな時代に計算機力学の研究室で有限要素法を用いた形状最適化手法の確立する研究を行いました。今では当たり前の設計とCAEの連成ですが、当時の私には斬新で新しく、大きな可能性を感じました。研究を通して習得した技術やスキルは、社会人になり私の武器となりました。

車の開発の主役が機械屋から電気屋に変わるとは想像できませんでした。機械屋の私が入社2年目に世界初のハイブリッド車、プリウスの開発に携われたことは大きな分岐点だったと思います。複合技術の融合を改めて実感しました。また、車に「環境」という新価値を付ける先駆けとして何かと新鮮に感じました。課題が山積し、日々葛藤の毎日で苦勞ばかりでしたが、街中で初めて走るプリウスを見たときの感動、誇らしさは今でも新鮮に思い出されます。何よりも、子供に自慢できるプロジェクトに関われたことは大変幸せなことでした。これも技科大という学びの場から続いていたことは運命だと信じています。

私は正直、真面目な学生とは言えませんが、素敵な恩師や先輩、仲間たちに恵まれたことには本当に感謝しております。人生は全てが運命的な道のりで、本当に幸せな人生だと実感しております。

時代は常に変わり続けており、順応していくことが必要です。技科大も変わり続けていると思いますが、学生の皆さんも時代の変化をポジティブに捉え、自分をアップデートすることに努めて行っていただきたいと思います。



高林 幸央

Yukio Takabayashi

1988年 生産システム工学専攻 修了
小林俊郎 研究室

1963年 愛知県生まれ
愛知県立豊丘高等学校 卒業

1988年 株式会社神戸製鋼所 入社
1997年 神鋼メックス株式会社 出向
2004年 (株)神鋼エッジ&メテックス(社名変更)
2022年 (株)コベルコE&M(社名変更)
現在 同社 システムエンジニアリング部

技科大には普通科高校から入学しました。実習や製図の授業ではやはり、工業高校や高専出身の同級生と比べて、基礎がほとんどない状態だったので、授業についていくのが精一杯でしたが、友人にアドバイスをもらうことで乗り切っていくことができました。そんな経験の今では良い思い出となっています。

大学を卒業し、入社してから配属先は生産管理システムを構築する部署であり、研究室で専攻していた分野とはかけ離れた業務内容でした。最初のころは戸惑うことが多かったです。しかし、仕事を進めていくうちに、大学で学習していた知識が所々に応用できることに気づき、より効率的に工場を管理することができるシステムを構築できました。年次が進むにつれて生産管理システム系から制御システム系の担当業務が多くなり、より大学で学習した圧延理論や流体工学、材料力学、鉄鋼・非鉄金属の知識が必要となり、大学時代の教科書を引っ張り出しては読み返し、システムに活用できる部分はどこかを検討する日々を続けていました。自分で構築した制御モデルを組み込んだシステムが無事に工場の設備を動かしたときの達成感は今も忘れられません。

現在は神戸製鋼所以外のお客様に対して、生産管理システムや制御システムを提案しお客様と一緒にシステムを構築していく仕事をしています。この仕事で一番大切なことは、お客様の要求を如何に具体的な言葉で表現できるかということになります。

在校生の皆様、これから就職してからの配属先で今まで自分が専攻してきた内容と異なる部署に配属されることがあるかも知れませんが、長い目で見れば無駄になることは絶対にありません。何事も前向きに考えて行きましょう。



太田 雅

Masashi Ota

2019年 電気・電子情報工学専攻 修了
福田光男 研究室

1991年 鳥根県生まれ
松江高専 卒業

2016年 日本学術振興会特別研究員(DC1)

2019年 日本電信電話株式会社入社 入社

2023年 International Electrotechnical
Commission TC86 SC86 WG3 委員

2023年 光産業技術振興協会 ファイバオプティクス標準委員会 委員、
光増幅器及びダイナミックモジュール標準化部会 委員

現 在 日本電信電話株式会社 研究主任

2012年に松江高専の電気工学科から、技科大の電気・電子情報工学課程に編入学しました。学生時代は福田光男先生のもと、表面プラズモンデバイスについて、主体的に研究に取り組み続けていました。元来、目の前のテーマに集中して他からの情報を遮断してしまう性格のため、テラーメイドバトンゾーン教育プログラムでの異分野融合特論には視野を広くする手助けをしていただき、現在の仕事でも活用できるような貴重な経験をさせていただきました。その後は先生や仲間の助けもあり学術振興会特別研究員に採用され、そのサポートで出た成果が評価されて博士号を取得し、NTT研究所に入所することができました。順風満帆に思われますが、過程では沢山の失敗を経験しており、それと同じ数だけPDCA(Plan Do Check Action)サイクルをまわしてきました。その過程で、自分一人で切り拓くことのできる未来には限界があると感じ、「チームとしての成果創出」に挑戦したくなり、企業研究者の道を選びました。

NTTでは、次世代光通信デバイスの研究開発を担当しております。入社後は光デバイスに関する知見を軸に、光通信や機械学習、機械工学など幅広い分野のピラミッド型の知識を身につけています。NTTでは各居室に各分野の最先端の研究者がいるため、高専や技科大で培った幅広い知識をベースに、研究者間の連携によって更に成長できたと実感しています。

学生時代では将来何に活きるのか実感できないような知識でも、頭の片隅にあるだけで引き出しと成長スピードが違ってきます。その積み重ねは世界最先端に届き得るので、あらゆることに主体的に挑戦して引き出しを増やしてみてください。私も積み重ねの最中なので、一緒にがんばりましょう。



二川 雅登

Masato Futagawa

2002年 電気・電子工学専攻 修了
澤田和明 研究室

1977年 香川県生まれ 高松高専 卒業

2002年 株式会社東芝 入社

2008年 豊橋技術科学大学 研究員
豊橋技術科学大学博士後期課程電子情報工学専攻入学

2011年 豊橋技術科学大学博士後期課程電子情報工学専攻修了(工学)取得
豊橋技術科学大学テラーメイド・バトンゾーン教育推進本部 特任助教

2014年 静岡大学工学部電気電子工学科 准教授

2018年 デルフト工科大学(在外研究)1年間

2024年 静岡大学工学部電気電子工学科 教授 現在に至る

高松高専(現在の香川高専)の電気工学科を卒業後、豊橋技科大電気・電子工学科の3年次に編入学しました。大学では、学園祭実行委員会に所属し、勉学と実行委員会を両立させながらとても充実した時間を過ごすことができました。今でも毎年、技科大祭の時期に学園祭実行委員OB・OGで豊橋に集まり、近況を報告しあっています。研究室は、集積回路・センサシステムグループに入り、結晶成長から能動素子の製作、電界電子放出素子の製作といった幅広い内容の研究を行うことができました。2002年に修士課程を卒業後、研究室の経験を生かし、東芝で半導体デバイスの開発に携わり、製品化するための様々な知識や歩留まり管理などを身につけました。30歳の時に心機一転、転職をし、恩師の石田・澤田先生の元で研究員をしながら博士課程に進学し、2011年に無事博士号を取得することができました。今振り返れば、修士を卒業してからここまで、激動の期間だったように思えます。

2014年からは、お隣の大学である静岡大学(浜松キャンパス)の電気電子工学科に准教授として着任し、丸10年が経過しました。高専で卒業研究を経験して来る技科大生とは異なり、実験の楽しさを知らない一般高校出身の学生に達成感を味わってもらいたいと、日々教育・研究に力を入れています。2018年にはオランダのデルフト工科大学に1年間行かせてもらい、回路設計を勉強しました。休日は日本人サッカーチーム(チーム名:サムライ)に入れてもらったり料理に挑戦したりと、単身者ならではの楽しみ方をしました。

人生何が起こるか分からないため、いざという時に困らないよう、在学生の皆さんには視野を広く持ち準備だけはしっかりしてほしいと思っています。



下野 幸助

Kosuke Shimono

1999年 電気・電子工学課程 卒業
藤井壽崇 研究室

1976年 三重県生まれ
鈴鹿高専 卒業

2001年 内閣官房(国家公務員/内閣事務官)

2008年 慶應義塾大学大学院経営管理研究科 修了

2008年 アイシン精機(株)経営企画室 入社

2011年 三重県議会議員初当選(以降連続4期)

現 在 衆議院議員(三重2区、1期目)

私の父が電気工事屋を営んでいたこともあり、鈴鹿高専を経て1997年に技科大の電気・電子工学課に編入学しました。師事した藤井壽崇先生は描画展を開かれるなど多彩な方で、専門の電気磁気材料や磁性体以外にも多くを学ばせていただいたのですが、私が大学時代に一番力を注いだのは主将を務めたトライアスロン部での活動でした。しかし、学業を含め技科大で培った礎がその後の人生、今の仕事に確実に活かされていると思っています。

最初の就職先となった内閣官房内閣情報調査室は、日本のCIAとも称される組織のため業務内容を詳らかにできませんが、私は初の理系プロパーとして採用されることになります。就職した2001年は、情報収集衛星を開発・運用・分析する内閣衛星情報センターが立ち上がったタイミングでもあり、私は理系の強みが生かしながら、組織が軌道に乗るまで仕事をさせていただきました。

その後、慶應義塾大学大学院でMBAを取得し、アイシン精機の経営企画室に入り、三重県議を4期務め、昨年10月の衆議院選挙で初当選させていただきましたが、この目まぐるしく変わる人生の中で、トライアスロンで養われた体力が物を言っていたことは間違いありません。

そして、現在は衆議院議員の1年生議員です。毎朝早くから党の政策会議に出席し、昼間は議会活動、その合間に役所との意見交換や議員同士の自主的専門的な政策勉強会を行います。それは夜にまで及ぶことも多々あります。一般的な世間のイメージとは異なり、国会議員の活動は真面目でかつハードです。

「大学時代は何に力を入れていましたか?」と聞かれれば「トライアスロン!」と迷わずに答えますが、人生に無駄はなく必ず何かの役に立つものです。



古野 志健男

Shigeo Furuno

1982年 電気・電子工学専攻 修了
英貢 研究室

1957年 滋賀県生まれ
福井高専 卒業

1982年 トヨタ自動車工業(現:トヨタ自動車)株式会社入社

2005年 東富士研究所 エンジン先行開発部 部長

2012年 (株)日本自動車部品総合研究所(現:SOKEN) 転籍

2013年 同社 代表取締役専務

2018年 (一社)日本自動車部品工業会 技術顧問
日経クロステックコラムライター 現在に至る

2020年 同社 エグゼクティブフェロー 兼 (株)デンソー 技監 現在に至る

光陰矢の如し、豊橋技科大修了から早43年となります。1976年の開学からは49年目です。来年2026年は開学50周年。約半世紀、多くの我々仲間が巣立ち、世界や日本で活躍されています。2023年6月の日経新聞では「企業が今後採用を増やしたい大学ランキング」で全国1位を獲得しました。豊橋技科大の世の中への貢献度は大きいと思います。大学自身も持続的な成長を遂げ、強力な産学連携をベースにグローバルでイノベーションを創出できる人材育成にも尽力されています。

私は、2014年11月から2020年3月まで第7代同窓会会長として努め、幾つかの事業を実施させて戴きましたが、大きな課題であります同窓生の人脈の輪を広げるには不十分で反省するところです。会長時代に限りませんが、もっと同窓生の絆を広げるべく幾つかの会社で雲雀会を発足して戴きました。トヨタ自動車、デンソー、スズキ、そして豊田中研では1984年には早々と雲雀会が発足していました。昨年2024年11月には、それら4つの雲雀会を1つにした合同雲雀会を開催できました。随所で「えへ、お前が」みたいな会話が聞かれる中、盛大にお開きに。まだまだ小さな規模での繋がりですが、皆さんも所属される組織で是非〇〇雲雀会を発足して戴いて、日本全体に技術科学の絆が広がっていくことを切望致します。個人でも組織レベルでも必ずWin-Winとなります。技科大同窓生の繋がりを軸に、同窓生以外の多くの方々との繋がりにも発展していくと思います。技科大同窓生の一人になれた幸運に感謝です。



中古賀 理

Satoshi Nakakoga

2021年 情報・知能工学専攻 修了
南哲人 研究室

1994年 長崎県生まれ
有明高専 卒業

2021年 鳥羽商船高等専門学校 助教

2023年 鳥羽商船高等専門学校 准教授
現在に至る

有明高専を卒業後、「高専教員になりたい!」という目標だけを漠然と掲げ、技科大に進学しました。特定の何かを教えたい、研究したいということは決めていないまま研究室配属を迎え、そこで当時新設された南研究室に所属することを決めました。それは「1期生だし、気楽に楽しくやれそう」という不純な動機も多少ありましたが、振り返るとその選択に間違いはありませんでした。結局は中内研究室との合同研究室であったので気楽とは言えない研究室生活でしたが、南先生・中内先生をはじめ、多くの先輩・同輩・後輩にも恵まれて過ごした7年間は人生においてもかけがえのない時間です。

博士取得後は技科大から海を渡ってすぐの鳥羽商船高専に赴任し、念願の高専教員となることができました。赴任してから、学生視点から見た高専教員の業務は本当に一部だったんだな、ということを実感しました。授業や研究だけでなく、担任や部活動、寮の宿直、学校のPR活動など多岐にわたる業務に初めは驚きましたが、学生と一緒にになって取り組むことの面白さに日々やりがいを感じて、刺激のある生活を送ることができています。また、高専教員には技科大出身の先生方が多く、初めてお会いする際にも技科大の話で盛り上がります。その度に楽しかった大学生生活を懐かしんでいます。

つい最近まで学生と同年代だと思っていた私も気が付けば30歳を超え、学生たちが話すトレンドの話題に「何それ?」と尋ねる場面が増えました。それでも、いつまでも学生たちと同じ目線で関わり、彼らの成長をサポートしていきたいと強く思っています。同じ夢を持って進む道の先輩として、少しでも背中を押してあげられる存在になれば幸いです。



小暮 徹

Toru Kogure

1996年 知識情報 工学専攻 修了
高橋由雅 研究室

1972年 神奈川県生まれ
福島高専 卒業

1996年 株式会社HADSYS 入社
現:日立Astemo(株)

現 在 同社 財務統括本部
現在に至る

今回、突然の執筆依頼を受け、当時のことを振り返ってみました。福島の田舎から豊橋の田舎にやってきて色々なカルチャーショックを受けながら、あっという間の4年間だった気がします。現在は栃木県の宇都宮に住んでおりますが、2023年にLRTが開通しました。そういえば豊橋も路面電車走っていたな、と懐かしい記憶がよみがえります。当時の7系に編入し、ワークステーションを使ったタイピング演習、Latexでのレポート作成、C言語のプログラミング演習等の課題には非常に頭を悩ませられました。また当時Windows3.0が発売され、色々いじり回したのが記憶に残っています。私の場合、在学時の研究内容とは畑違いの分野へ就職しました。もうすぐ社会人30年になりますが、合併による社名の変更、転勤、協力会社へゲストエンジニアとして出向、中国での駐在員の経験等を体験し、心身共につらいこともありましたが、研究室生活で培った忍耐力が役に立ったのは過言ではありません。

ここ数年は現在高校生の長男が、小学生の時なぜかサッカーをやりたい(私はサッカー未経験)、ということで近くのチームに入り、保護者として審判ライセンスを取得したのですが、子供がサッカーを辞めてからも審判活動だけは続けることになり、身に迫る体力の衰えと闘いながら雨にも雪にも負けず、おいしいビールを飲むための口実のために毎週末近郊のサッカー場で汗を流しています。

在学生の皆様には勉強だけでなく、色々なことに取り組んでいただければと思います。「チャレンジしない限り、チャンスは訪れない」

今後も大学はじめ、関係者の皆様の発展を願っております。



四ノ宮 大輔

Daisuke Shinomiya

1999年 情報工学専攻 修了
宇野洋二 研究室

1974年 埼玉県生まれ
呉高専 卒業

1999年 富士通株式会社 入社

2024年 エフサステクノロジーズ株式会社 出向

現 在 同社 プロダクトソリューション事業本部アライアンス
ビジネス事業部ビジネスプロセス変革部

1995年に呉工業高等専門学校 電気工学科から情報工学系(旧4系)に編入し、修士課程修了まで4年間お世話になりました。電気よりは情報がよいか程度の感覚で専攻を変えたのですが、新しいことに挑戦する楽しさを改めて感じられ、その後の人生に大きな影響があったと思っています。

私は現在、アライアンスビジネスに従事しており、主にネットワークやセキュリティの製品への付加価値サービスの企画をしています。もともと入社時はネットワークに関する部署で勤務しておりましたが、10数年前に自社製品の開発に携わり、セキュリティ機能の企画をして以来、セキュリティに関わっております。その結果、縁あって社外の委員会活動として、総務省の通信機器の認定基準変更の検討メンバーとして参加するなどしてきました。興味をもってやっていたことが、社外にも繋がり貴重な経験をする事が出来ました。

仕事に限らず、興味を持ったことには何でも挑戦しており、10数年前から会社の合唱団に所属して歌っています。コロナの時期は集まって歌えなかったので、リモート合唱団画を作成していました。(いくつか、YouTubeにアップもしていますので、ご興味を持った方は、“富士通川崎合唱団”で検索してみてください。)

公私ともに新しいことに挑戦し、充実した日々を送っています。これも、豊橋技科大で様々な事に挑戦したおかげだと思っております。在学生の皆様さ、どんな経験も活かせるチャンスがありますので、在学中にいろんなことに挑戦してみてください。最後になりますが、皆さまの今後のますますのご活躍をお祈り申し上げます。



長谷川 和男

Kazuo Hasegawa

1990年 情報工学専攻 修了
宮崎保光 研究室

1965年 愛知県生まれ
愛知県立刈谷高等学校 卒業

1993年 システム情報工学 修了

1993年 株式会社豊田中央研究所 入社

2020年 光産業創成大学院大学 着任

現 在 光産業創成大学院大学 教授

私は、修士課程修了にあたり民間企業の研究所への就職を模索したが、最終的には博士課程へと進学した。光集積回路の研究を深め、博士の学位を取得した後、豊田中央研究所に就職した。豊田中央研究所では、光計測やレーザー加工の研究に従事し、新技術の可能性を模索しながら実用化に向けた課題に取り組んだ。27年間勤めた後、ご縁があり光産業創成大学院大学へと異動した。当時、民間企業の研究所へは学位がなくても就職できたが、大学に異動するには学位が必要であり、博士課程で学位を取得していたことが役立った。近年、論文博士の制度は縮小し、新たに社会人向けの博士課程が整備されている。仕事をしながら学位を取得することも十分に可能になった。企業によっては社会人コースへの派遣制度がある。そのような視点で就職先を選ぶのも一つの考え方だ。

私の経験から言えるのは、目の前の選択肢だけにとらわれず、将来を見据えて決断することの大切さである。博士課程進学を決めたとき、どのような道が開けるかは不透明だったが、結果として幅広いキャリアの可能性を得ることができた。特に光技術やレーザー技術の分野では、常に新しい知識を学び続ける姿勢が求められる。先輩の皆さんには、自分の興味や情熱を大切にしながらも、長期的な視点でキャリアを考えてほしい。今の選択に確信が持てなくても、挑戦することで新たな道が開けることは多い。技術者・研究者としての成長には試行錯誤と努力が不可欠である。未来を切り拓く気概を持ち、一步一步前進して行ってほしい。



木下 洋輔

Yosuke Kinoshita

2012年 環境・生命工学専攻 修了
水野彰・高島和則 研究室

1987年 長崎県生まれ
佐佐保高専 卒業

2012年 株式会社東芝 入社

2016年 木工家具職人

2022年 株式会社日立産機システム 入社

現 在 同社 環境戦略部 部長代理

佐佐保高専在学時に、「地球環境に貢献することを生業としたい」という漠然とした想いを抱き、2008年に豊橋技科大のエコロジー工学課程に編入することを決めました。そして現在、幸運なことに、産業機器メーカーの環境戦略部として、脱炭素社会(ネットゼロ)や高度循環社会(サーキュラーエコノミー)の実現に向けた戦略の策定・推進に携わっています。特に気候変動の問題は年々深刻化しており、持続可能な社会の実現に向けたイノベーションが求められる中で、自身の業務が課題解決に直結することに大きなやりがいを感じています。

振り返ると、学部時代は決して学業に真剣に向き合えていたとは言えませんでした。修士課程に進んで本気で研究に取り組むようになり、思うような結果が得られない日々にも焦りを感じることもありましたが、先生方からのご指導や研究室仲間の支えによって、その度に壁を乗り越えることができました。研究で行き詰まったときには、よく仲間と大学近くの海岸で水平線を眺めて気晴らししていたことを今でも懐かしく思い出します。研究室での日々は決して楽なものではありませんでしたが、その分、素敵な仲間恵まれ、充実した貴重な時間を過ごせました。仲間と苦楽を共にしながら困難を乗り越えてきたことが、現在の仕事の推進力にもなっていると思います。

学生時代に得られるものは学問的な知識だけではありません。困難に立ち向かう力や、共に努力して支え合った仲間の存在は、社会に出てからも大きな財産になります。たくさん学び、たくさん遊び、仲間との時間を大切にしながら、答えのないVUCA時代に自分自身の進む道を切り開いていってください。



南 亘

Wataru Minami

2000年 エコロジー工学専攻 修了
金 熙濬 研究室

1975年 石川県生まれ
石川高専 卒業

2002年 エコロジー工学系 助手

2006年 環境生命工学 博士(工学) 取得

2006年 カナダ アルバータ大学 客員研究員

2008年 日立建機株式会社 入社

現 在 同社 生産技術統括部 先行開発部
脱炭素推進グループ グループリーダー

このような執筆の機会をいただきまして感謝します。季报の場を借りて私の人生を総括し、後進たちへのエールを送りたいと思います。

今思えばいろいろなことに挑戦させて頂いた人生だったと思います。中学の時は技術を学びたくて高専に入り、卒業して一旦会社に入ったもののすぐにやめて大学に編入しました。大学では博士課程まで挑戦させてもらって、その後は助手職も経験させて頂きました。海外の大学で研究する機会もいただいてエンジニアとしての挑戦をさせて頂きました。その後、32才で会社に入ってから企業での研究開発を行って、45才位からは工場の生産向上やグループの運営などに携わっています。

挑戦の質は大きく2つに分けられます。前半の40才位までは技術や知識を学んで、それを活用して社会に役立つことを重視しました。後半の挑戦は人や社会を深く理解することです。人は何をどう考えて、それが今と将来の人間社会の幸せにつながるか、などといったことです。

挑戦にはいろいろな痛みもありました。最初に就職した会社を辞めるときは高専の先生からはひどく叱られ、大学院進学時にも内定をもらっていた会社から叱られ、会社ではそんなことして役に立たないと叱られてきました。しかし叱る側がいる他方では、その決断を応援してくれる側の人もありました。

終身雇用制が崩壊した現代に就職する後進の皆様は、私のときよりもさらに挑戦ができる、認めてもらえる社会になっていると思います。この会社で役に立たないなら他の会社に行けばよい、日本で役に立たないなら海外に行けばよい、と思います。みなさんが信じて進めてきた研究や真理の追究は、どこかでは歓迎されます。広い視野をもって挑戦してください。



田畑 智博

Tomohiro Tabata

2002年 エコロジー工学専攻 修了
藤江幸一・後藤尚弘 研究室

1978年 三重県生まれ
鳥羽商船高専 卒業

2005年 名古屋大学大学院環境学専攻修士課程修了

2005年 名古屋大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻 助手

2007年 産業技術総合研究所 産総研特別研究員

2010年 名古屋大学大学院環境学専攻 研究員

2010年 神戸大学大学院人間発達環境学専攻 講師

現 在 神戸大学大学院人間発達環境学専攻 准教授

大学院修了から23年経ち、時の流れの早さに驚いています。当時、私の同級生で博士後期課程に進学したのは8名くらい?とても多かったように記憶しています。同級生が内部進学するなか、私は研究環境を変えたいと思い外部の大学に進学しました。当時のことを考えると捉破りだったかもしれませんが、先生方が私を快く送り出してくれたことに今でも感謝しています。

現職での私の研究テーマは、環境・経済・社会の視点から、持続可能なまちづくりの達成に伴う社会変革の道筋を提案していくことです。持続可能性に資する政策として、カーボン・ニュートラル(脱炭素)、サーキュラー・エコノミー(資源循環)等が国内外でトレンドになっています。私の研究室でもこれらの政策に関わる研究に携わっており、LCA(Life Cycle Assessment)等の工学的な評価手法に社会科学的・経済学的な評価手法を組み合わせて、社会実装を念頭に入れた実践的な研究を行っています。私の研究テーマのキーワードを挙げると、プラスチックの資源循環、再生可能エネルギー、災害廃棄物、ライフスタイル等と多岐に渡っていますが、どれもまちづくりに欠かせません。また、近年は企業のScope3対応等が求められていますが、私はこのような観点からの産学連携活動も行っています(なんなりとご用命ください)。

現在の研究活動は、技科大での学びがきっかけになっています。もし技科大で学んだ経験がなければ、今の私はありませんでした。エコロジー工学が無くなったのは寂しいですが、時代の要請であれば致し方ないと思います(現職でも、再編・統合の話は日常茶飯事です)。しかし、沢山のOB・OGが社会で活躍しており、エコのスピリットは今なお生き続けていると確信しています。



成田 慶一

Keiichi Narita

1998年 物質工学専攻 修了
角田範義 研究室

1973年 青森県生まれ
八戸高専 卒業

1998年 株式会社キャタラー 入社

現 在 研究開発本部 副本部長

長崎大学田邊先生より原稿執筆のリレーを承りました。今回、このような貴重な機会をいただき同窓会活動の盛り上げに少しでもお役に立つことができれば幸いです。私は1994年に八戸工業高等専門学校から、豊橋技術科学大学物質工学系へ編入しました。大学生活では、多くの友人の輪を広げることができました。特にサッカー部のメンバーとは卒業以来20年以上経ちますが、系の枠や年代の枠を超えて仲良きさせてもらい、昨年は紅葉が見ごろの時期の京都に集合し、みんなで保津川下りに挑戦しました。大学時代は2種の貴金属の合金を創り出すことを研究テーマとしており、XRDのようなスタティックな状態解析とin-situ XAFSのようなダイナミックな状態解析を組み合わせることで、2種の貴金属の合金状態がどのようにになっているかを精緻に解析していました。大学院卒業後は、静岡県掛川市に本社を置く株式会社キャタラーへ就職し現在に至ります。弊社では自動車から排出される排気ガスを無害化する“触媒”を事業としておりますが、私のチームは国内/海外の自動車メーカーの方々と一緒に高性能かつ耐久性に優れる“触媒”の研究開発に取り組んでいます。グローバルでの排気ガス規制の強化に対して、“触媒”に使用される希少な貴金属やレアアースの使用量を低減していくことは、省資源化の観点からも非常に重要な技術開発となります。大学時代の研究で得た学び、特にin-situ/ダイナミックな状態を直接観察することは、より有効かつ実践的なアイデアの創出に役に立っています。現在、私たちの業界は「100年に一度の大変革の時代」に入っています。私はこれからも業界の枠にとらわれず、資源問題や社会問題の解決に貢献したいと考えています。



佐々木 大輔

Daisuke Sasaki

2009年 建設工学専攻 修了
松島史朗 研究室

1984年 秋田県生まれ
秋田高専 卒業

2009年 (株)日建設計 入社
現在 (株)日建設計 Digital Design Lab所属

(入学したての20年前の私と、現在の私との対談形式となっております)
入学当時のヤング佐々木 (以下、Y) 「本日はよろしくお願ひします。」
現在の中年ミドル佐々木 (以下、M) 「どうも、お手柔らかに。」
Y 「では早速ヤング佐々木から質問です。技科大に入って良かったですか？」
M 「いきなり直球だ(笑)。まあ、当時は結構悩んでいましたが今なら自信を持って言えます。良かったです。当時の松島研究室で取り組んだ学生寮や学生交流会館、身体のアゴリズムによるデザイン、BIMやデジファブなど、特定の専門知に依らない体験をしたのが、その後の糧となっているね。」
Y 「なるほど、少しホッとしました…。めざす建築家になれたようで。」
M 「あー、ちなみに建築家にはなっていないよ。」
Y 「え！あれだけ目指してたのに！？一体いまは何をしてるんですか？」
M 「今は日建設計という組織設計事務所のデジタルデザインラボという部で、建築やデータ等の『情報』をもとに、コンピュータを駆使してデザインや研究開発をしています。建築と情報ってどちらもアーキテクチャという意味があって、そこが舞台なので広い意味ではアーキテクトかも。」
Y 「ややこしい(笑)。でも好きなことをやれているようで良かったです。では最後に20年前の私を含む技科大生に一言あればお願いします。」
M 「技術や科学というもの、20年、いや数年で陳腐化します。その中で陳腐化せず長持ちする『知』や『価値』って何なのかを考えたり、体験したり、気づきを『発見』しましょう。技科大はその機会に恵まれているはず！」
Y 「ありがとうございました！では続きの本音トークは『あねごや』で…。」



辻野 和彦

Kazuhiko Tsujino

1999年 建設工学専攻 修了
河邑眞 研究室

1974年 福井県生まれ
福井高専 卒業

1999年 福井工業高等専門学校 助手
2005年 同校 講師
2009年 同校 准教授
2020年 同校 教授
現在 同上 地域連携テクノセンター長

1999年に技科大の大学院を修了した後、福井高専環境都市工学科の助手として赴任しました。学部4年次、旧6系の河邑眞先生の研究室の門戸を叩き、学生時代は衛星RS(リモートセンシング)やGIS(地理情報システム)を用いた斜面防災に関する研究に取り組みました。高専に勤務してからも先生のご指導を仰ぎ、博士(工学)の学位を取得しました。有難いことですが、現在もJAXAや福井県、民間企業等と連携して研究を継続しています。河邑先生は地盤工学が専門でFEM(有限要素法)やDEM(個別要素法)に加え衛星RSやGISも柱として研究されていました。河邑先生は多面的な視点で、時には俯瞰するように物事を見られており、アドバイスが的確であったことを覚えています。また、画像処理だけでなく現地の状況を見ることの大切さも学びました。温暖化の影響で雨の降り方が極端になっていますが、災害発生後の現地調査にも足を運ぶよう心掛けています。大学時代に今の自分の基礎を築けたと感じています。

高専の教員になり四半世紀が過ぎました。部活動では高校野球の監督を継続しています。また、橋梁点検に関するリカレント教育にも取り組んでおり、先日、第8回インフラメンテナンス大賞表彰式において国土交通大臣賞を受賞してきました。OB教員あるあるかもしれませんが、授業では軸となる測量学や空間情報工学に加えて構造力学も担当しています。実験実習では、UAV(無人航空機)による三次元点群測量に加えて、RC梁の曲げ試験や疲労試験も担当しています。色々な経験を通して、少しは私自身もマルチな視点を持てるようになったかもしれません。技科大の学生さん、高専は楽しいですよ。今は求人数も多く就職し易いと思いますが、ぜひ高専教員への道も選択肢に入れて下さい！



大屋 誠

Makoto Ohya

1995年 建設工学専攻 修了
加藤史郎 研究室

1970年 島根県生まれ
松江高専 卒業

1995年 松江高専 助手
2001年 豊橋技科大 助手
2002年 松江高専 助手/講師/助教授/准教授
2015年 松江高専 教授
現在に至る

大学院修了後、母校の松江高専の教員になり、約30年間勤務しています。2001年から1年間技科大の助手を経験した後、再び松江高専に戻りました。高専時代、技科大4年間はラグビー部で活動し、現在も松江高専でラグビー部の顧問を務めています。松江高専では、構造力学、鋼構造学、建築設計に関する科目など、土木工学と建築学の両方の科目を担当しています。

松江高専の施設整備に携わる機会があり、学生時代に学んだ空間構造や建築に関する知識を生かし、学生たちの学習や交流の場として大空間構造物を活用した「学びの庭」、実習工場を2階建に改築し、松江高専のものづくりの拠点『イノベーション・ハブ・まつえ』の建設、図書館の改修事業に参加しました。

2016年度から、次世代の建設技術者に注力しています。具体的には、土木と建築に関する専門技術とICT・AI技術を併せ持ち、デジタル技術による建設分野の変革に意欲を持つ人材の育成を目指しています。講義の中にBIM/CIM、i-Construction、自動化技術、AI技術などを学ぶためのカリキュラム構築と教材開発を学生たちと楽しみながら行っています。これらの取り組みは、技科大での学びが基盤となっています。今後も新たな学びを楽しみながら、次世代の技術者育成と地域貢献を両立させ、地方から日本を活性化させたいと思っています。



由田 徹

Toru Yoshida

1990年 建設工学専攻 修了
瀬口哲夫 研究室

1965年 石川県生まれ
石川高専 卒業

1990年 株式会社 北川原温建築都市研究所 入社
1998年 ヨシダ宣伝株式会社 入社
1999年 株式会社 ザ・スタジオ1級建築士事務所 取締役所長
2006年 ユウプラス1級建築士事務所 設立 所長
2007年 株式会社 ユウプラス 設立 代表取締役
現在に至る

建築家北川原温を師事し、7年の経験の後、生まれ育ったふるさと能美市に活動の拠点を移しました。石川県を中心に広くデザインと建築設計・監理の仕事を展開し、特に古民家再生の仕事に取り組んできました。古民家再生の仕事の延長として、空きビル活用の相談があったことをきっかけに、耐震改修と用途変更を同時に進める抜本的な改修手法で、リノベーションホテルの香林居(2022)とHOTEL AO(2024)のデザインチームに参加し、金沢市に完成させています。その他、奥能登芸術祭2024では、コンテンポラリーアートの設置のための設計など、現代建築の延長にある仕事にも積極的にかかわってきました。2014年より北陸先端大学院大学の知識科学過程の博士後期課程に在籍し、デザイン学と創造学の分野で博士を取得し研究活動も展開してきました。現在は、2023年5月5日、奥能登地震の発災より、文化庁の文化財ドクター派遣事業の派遣員のリーダーとして活動を行っていたところ、2024年1月1日さらに大きな地震が能登半島で発生した。発災後文化財ドクター派遣事業を拡大し、石川、富山、新潟の3県でスタートした。全国の歴史的建造物の調査設計にたけた建築士を組織して、国や県そして各市町と調整しながら、1年は調査漬けの毎日でした。車の走行距離は30,000Kmを超えています。建築の意味を見つめながら、大切な建築をしっかりと後世に繋いでいく覚悟で活動を続けています。

